令和６年度

福祉作文コンクール入選作文集

社会福祉法人　久慈市社会福祉協議会

―目　次―

小学校高学年

最優秀作　みんなで協力して生きていく　……　小久慈小学校　四年　松本　瑠璃　……　1
優秀作　飢餓の現状　……　侍浜小学校　四年　久慈　京佳　……　2
佳作　福祉について知った日　……　長内小学校　四年　木村　あかり　……　3
佳作　当たり前に感謝して生きる　……　侍浜小学校　四年　越戸　咲名　……　4
佳作　フードロス削減大作戦　……　侍浜小学校　四年　菅原　一真　……　5

中学校

最優秀作　福祉の心を育てる　……　山形中学校　三年　大畑　寧々　……　7
優秀作　障がい者の方々との関わり　……　久慈中学校　二年　鈴木　稚望　……　8
佳作　生きる　……　久慈中学校　二年　熊谷　野乃花　……　10
佳作　福祉について　……　久慈中学校　二年　坂上　ジーナ　……　11

高等学校

最優秀作　私が考える「福祉」……久慈東高校　二年　泥濘千咲……13
優秀作　私の夢とフラダンス……久慈東高校　二年　林﨑風佳……15
佳作　筆談ボードと福祉……久慈東高校　二年　小上柚奈……16
審査委員の感想……18
応募者・入選者……20
実施要項……22
審査委員……24

小学校高学年の部

＊最優秀作

＊優秀作

＊佳作

最優秀作

みんなで協力して生きていく

小久慈小学校　四年
松本瑠璃

わたしには、大好きなおじいちゃんがいます。この前、目の手じゅつで入院をしていました。おじいちゃんは耳が遠いので何回もゆっくり言わないと聞こえません。わたしは、よくおじいちゃんの家に行ってたくさんお話をしたり、いっしょに夜ごはんを食べたりしてます。いっしょにお話をするとにこにこしながら聞いてくれるので、その時はほっとしてうれしい気持ちになります。わたしは、もともとおじいちゃんやおばあちゃんが好きなので、いつも車で走っている時におばあちゃんたちが元気そうにゆっくり歩いているのを見かけると、ほっとします。登下校中にも、「おかえり。」と言ってくれてうれしいです。

今は元気で、わたしのことをすごくかわいがってくれているおじいちゃんだけれど、これからどうなるかが心配です。これから年をとり、さらに耳が遠くなるかもと思うと、今の楽しい時間がなくなってしまうのかなと心配です。

この前、学校でふくしこうざに参加し、きづいたことがありました。

一つ目は、命の重さです。車いす体験をして、車いすをおす人は大へんなのだと思いました。車いすをおす人は乗っている人の命をあずかっています。だから、動作の一つ一つをていねいにしないといけないことに気づきました。

二つ目は、目が見えない人はすばらしい人間の一人だと感じました。なぜなら、目が見えなくても生活できるからです。わたしは白じょう体験をする前は、目をかくしても、よゆうに動けると思っていました。しかし、実さいに体験して、自分が行きたい方向ではないところに行ってしまい、きょうふを感じました。この二つの体験を終えて、パッと感じたことは、「こんな生活が一生続くのはいやだな」と。

でも、足や目が不自由な人たちも同じようにくらしています。わたしはふしぎに思いました。

この前、パラリンピックを見ました。目が不自由な人もダンスをしていて、びっくりしました。目が見えないのに、楽しそうにおどっていて、「本当に目が見えないのか」と思ってしまうぐらいすごかったです。

わたしは、目や足が不自由な人が楽しく生活できているのは、その人の努力はもちろんですが、ふくしがじゅうじつしている社会とまわりの優しさのおかげだと気づきました。だから、おじいちゃんがこの先、年をとっても大丈夫。ふくしがあるから、おじいちゃんもわたしたちも今のような楽しい時間をすごすことができると思いました。そして、ぜったいしてはいけない事はふ通の人と不自由な人の区別。わたしはふくしに感しゃし、みんなを区別しないで生活していきたいです。

優秀作

飢餓の現状

侍浜小学校　四年
久　慈　京　佳

私は、総合の時間のハートフルタイムで、飢餓について調べました。私は今まで、飢餓という言葉は聞いた事がありませんでした。その言葉には、二文字では言い表せないような、深い意味がかくされていました。

調べていく中で私は、飢餓というのは大人にも赤ちゃんにもかかわる身近で、未来にもかかわる問題だと気付きました。その理由は、飢餓状態の妊婦さんが出産しても、母親が十分な栄養を取れていないので、赤ちゃんにも栄養がいかないからです。もしかすると、その子供はなくなってしまうかもしれません。つまり、少子化にも影響していて、新たな命が生まれるものも生まれなくなってしまいます。

私は今まで、「このお菓子がほしいのに買ってもらえない。」「キノコやたけのこがきらいだから食べたくない。」などとぜいたくを言っていました。自分がどれだけ恵まれているかをしっかり理解していなかったのだと思いました。住む家もあるし、お腹いっぱいご飯を食べられることも当たり前だと思っていました。

しかし、世界は違いました。飢餓とは、食べ物が不足し十分に栄養が取れない状況のことを表します。世界では約七億四千万人が飢餓に苦しんでいます。四秒おきに世界では尊い命が一つ、また一つと消えています。こんなにも多くの人がなくなっているこの大きな問題を見過ごすことはできません。飢餓で苦しんでいる人の多くが、開発途上国と呼ばれる国に住んでいます。その理由は、自然環境や紛争などによるものです。干ばつが起きると、人々が口にする食品の品目が大幅に減少します。そのため、飢餓が多く起こるのです。

私が調べていて心に残った情報があります。それは、慢性的な飢餓は十分な食糧を確保できず、食糧不安が続くということです。そして、毎日二万五千人の人が飢餓によって命を落としています。

私は以前、テレビで王様の食事を見ました。とても豪華で食べきれないほどの食事でした。一方、ウガンダという国の人たちの食事はとても質素で、栄養も足りない食事でした。そのときに、私は「自分たちは食べ物に恵まれている。こんなに質素で栄養分が足りない食事を食べている人がいるんだなぁ。」と思いました。

私は、生まれた国が違うだけで貧困の差があり、食糧の確保に違いがでるのではなく、そういったことがない世界になってほしいと願っています。そのために私たちができることの一つが寄付です。実際、三千円の寄付で栄養強化ペースト百二十個にもなるそうです。この作文をきっかけに、みんなの飢餓に対しての気持ちがさらに強くなってほしいです。

佳作

福祉について知った日

長内小学校　四年
木村　あかり

わたしは、初めて白杖体験をしました。最初は、まっすぐ歩くことがとてもむずかしく心配な気持ちでいっぱいでした。けれども、サポートしてくれた人がいたおかげで、心配な気持ちが少しずつなくなり、かべや物にぶつからずにすすむことができました。

わたしがいちばんきんちょうしたのは、階だんです。階だんは、だん差があるし、転んでしまったらどうしようという心配な気持ちでいっぱいでした。ですが、これもサポートの人の声があることで、どこにだん差があるのか、どこで階だんが終わりなのかを知ることができました。白杖を使う人は、サポートの人がいてくれると、心配な気持ちやきんちょうする気持ちが少しへると思います。白杖を使う人を見かけたら、

「手伝うことはありますか。」

と声をかけて、サポートしてあげたいです。

車いす体験は、前にやったことがありました。わたしは、一つ疑問に思ったことがありました。

それは、「階だんはどうやって上るのか」ということです。少しのだん差であれば、移動することができますが、階だんは上ることができません。スロープやエレベーターのないところでは、困ると思います。足が不自由なことは、とても大変なことなんだと思いました。体験して、すごいと思ったことがあります。

それは、車いすの工夫です。車いすに乗っている人が落ちないように工夫されていました。車いすがコンパクトにたためることも初めて知りました。車いすは、一人でも移動することができるけれど、とても体力がいることなんだと感じました。車いすの人にもサポートできることがあれば、してあげたいです。

わたしは、今まで認知症という言葉を聞いたことがあったけれど、くわしくは知りませんでした。認知症は、日にちや家の場所が分からなくなったりするそうです。食べたものや料理に入れるもの、季節の感覚なども分からなくなることがあるそうです。症状は人それぞれです。種類もいろいろあるそうです。認知症の人に会ったら、やさしくせっして、何度でもくりかえし、教えてあげることに決めました。認知症の人も車いすの人も白杖の人も毎日大変な思いをして生活しているんだということが勉強になりました。その人だけでなく、周りのサポートも大切なんだと知りました。

この学習をして、自分の生活に役立てていきたいです。そして、自分にできることは何かを考えて行動していきたいです。

佳作

当たり前に感謝して生きる

侍浜小学校　四年
越戸咲名

みなさんは、毎日自由に口から声を出して友達や家族などと会話していると思います。私も家族や友達、学校の先生と毎日当たり前に会話しています。でもこの世界には、毎日当たり前に会話できない人もいることを私は総合の学習で知りました。

先日、学校で手話体験をしました。その時に、実際に耳の聞こえない方が来ました。その方は、東日本大震災のときに地震を知らせる無線放送が聞こえなくて困ったことや、大きな体育館で市長さんが市民に向かって話していたときに聞こえなくて困っていると、ちょうど後ろに手話通訳をできる人がいてとても助かったということを教えてくれました。

私はその話を聞いて、自分も手話をできるようになりたいと思いました。そして、本屋さんに行って手話の本をお母さんに買ってもらいました。家に帰ると、すぐに本を開いて手話の練習をしました。だけど、練習してもなかなか覚えられませんでした。私は、頑張って練習して何とか少しだけ覚えられました。とてもうれしかったです。それと同時に手話通訳さんは、耳の不自由な人のために毎日毎日頑張って練習したんだなと思いました。

私がもし耳が聞こえなくなってしまったらと考えました。私はたぶん手話を覚えたいと思うかもしれません。だけど、もし毎日手話を練習したとしても、家族や友達が手話をできないと会話できないことに気付きました。家族や友達と会話ができないなんて、今の私の生活では考えられません。もしも家族や友達と会話できないと考えただけでも、とてもとても悲しいです。それほど耳の聞こえない生活というのは恐ろしいと思います。街を歩いていても、耳が聞こえないから遠くで呼ばれても聞こえなくて、お店でお会計のときにも紙に書いて伝えなければなりません。とても私にはできないことをしていると思いました。

耳の聞こえない人たちの生活は、私たちの生活よりももっと難しい生活を送っているんだろうと思いました。その分、私たちよりも頑張って生活をしているんだと感じました。

私は、今ある自分の当たり前にもっと感謝する気持ちをもって生きていきたいです。

佳作

フードロス削減大作戦

侍浜小学校　四年
菅原一真

皆さんは、フードロスの量について考えたことがありますか。世界でどのくらいの人が栄養不足なのか調べたことはありますか。

ぼくが調べた結果、世界の人口の半分が栄養不足に悩まされていることが分かりました。その中の大部分がアフリカです。アフリカの人たちを救うことはできないのでしょうか。救うために、自分たちにできることはないのでしょうか。

実は日本では一年間でまだ食べられる食べ物が五百二十二万トン捨てられています。そこから少しでも減らすことはできないのでしょうか。もしも七パーセント減らすことができれば、一般廃棄物の処理費用は一億円近く減らすことができます。

お母さんにいつも

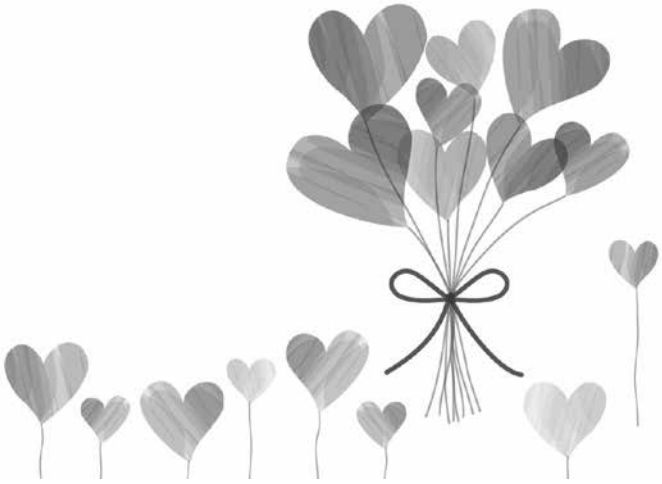
「あなたは、いつもおいしいご飯が食べられて幸せなんだよ。」

と言われていましたが、ぼくは今までみんな同じように食べられているのだろうと思っていました。だけど、世界中の様々な人たちが苦しんでいることを知って、行動を起こさないといけないと思いました。世界の食糧は無限ではありません。だからこそ、捨てられる量を減らしていかないといけません。

少しでもいいです。自分の小さな取り組みが、やがて世界中を巻き込んでいくことになり、アフリカの人々や世界中のフードロスを減らすことができます。フードロスがなくなれば、世界中の飢餓や食糧問題が連さ的になくなると思います。

SDジーズに向けて頑張るために、ぼくの考えは0円食堂をやればいいと思います。地域の魅力の発信にもなるし、廃棄予定のものを使って料理を作るので、フードロスを減らせると思います。それだけではなく、一人一人の小さなピースが埋めるようにしないといけないと思います。いつかみんなが幸せな世界となるように頑張っていきたいです。

そして、誰もが安心しておいしいご飯を食べられる世界になってほしいです。



中学校の部

＊最優秀作

＊優秀作

＊佳作

最優秀作

福祉の心を育てる

山形中学校　三年
大畑寧々

「福祉」について考えるときに、必ず私の頭に思い浮かんでくることは「助け合い」という言葉だ。社会には、様々な理由から困難を抱えて生活を送っている人が多くいる。思うように体が動かなかったり、意志の疎通が難しかったりする高齢者や障がいを抱えている方。経済的に厳しかったり、育児や介護に追われていたりする家族。そんな様々な事情を抱えている方に対して、私たちは一体どのようなサポートができるのだろうか。

私が福祉について興味をもったきっかけは中学校二年生のときに行った社会体験だ。私は地域の福祉施設で介護を中心とした実習をすることになった。そこには、介護士の方々が一生懸命に利用者さんと向き合い、笑顔で接している姿があった。その施設を利用している方々は元気がないのだろうなと予想していた私にとって、施設の活動に楽しそうに参加している利用者さんの姿は、とても驚くべきものだった。それと同時に、少なからず高齢者や障がいをもっている方々に対して、知らないうちに先入観をもっていたことを恥ずかしく思った。体験活動では、利用者さんとお話をしたり、一緒にゲームをしたりした。最初は緊張して、どう接してよいか分からなかったが、「ありがとう。」と利用者さんが笑顔で言ってくれる度に、心が温かくなっていった。職員の方々のように上手くサポートをしてあげたり、積極的に言葉をかけたりできていたわけではない。ただ一緒にそばにいて同じ時間を過ごしただけ。それでも利用者の方々は私を本当の孫のようにかわいがり、喜んでくれた。私の存在が他の人の喜びに繋がっているのかもしれないという思いは、自分になかなか自信をもてない私にとって、とても幸せなものだった。

そして、そこで働く職員の方々の姿にも感動を覚えた。「利用者の方々の笑顔を見た時は喜びを感じます。一人ひとりの状況に応じて、過ごしやすいように工夫を凝らし、安心感が生まれるように接しています。」

という話を職員の方から伺った。確かに施設内には季節に応じ、見ただけで楽しくなるような掲示物がたくさん貼ってあった。また利用者同士が交流できるイベントもたくさん企画されているようだった。職員と利用者の繋がりだけでなく、利用者同士の繋がりも深まってゆくことで、職員の方も安心して仕事ができるのだと思う。

私はこの経験を通じて、福祉の大切さを実感した。そして「助け合い」という意味も分かった気がする。「少しでも役に立ちたい」という思いで、私は一方的に利用者さんを支えていたつもりだった。しかし、利用者さんの笑顔や温かな言葉で私も救われていたのだ。それこそが、それぞれの立場で出来る助け合

いなのだと思う。

私は将来、福祉の仕事に携わりたいと考えている。高齢者や障がいのある方々が自分らしく生きることができるようにサポートする仕事は、とても意味があるものだ。一人でも多くの人達が、安心して笑顔で暮らせる社会を作るために、自分自身の力を最大限に発揮していきたい。福祉活動は決して特別なことではなく、私達の日常生活の中で出来ることから始まってゆく。学校で困っている友達がいたら優しく寄り添うこと、地域の行事に参加して、色々な世代の方々の話に耳を傾け理解すること。そんな些細なことでもお互いを認め、支え合える社会の実現に近づけることができるのだ。福祉は私達一人ひとりの心の中にある。誰かを助けることが、幸せを伴いながら自分の生きる糧になるのだ。私が大人になり、社会に出るまであと数年。地域の方々、そして自分自身も笑顔で自分らしく生きられるよう、福祉の心を大きく育てていきたい。

優秀作

障がい者の方々との関わり

久慈中学校 二年
鈴木 稚望

障がいのある方々は、幸せなのだろうか。私がふと思った疑問です。私の両親は障がいのある方々と一緒にお仕事をする会社で働いています。ある日、その会社で障がい者の方々と一緒に運動会をする日があり、お母さんがはりきっていました。そこで私は、ふと、障がいのある方々は運動ができるのか。障がいがあるのに運動をして楽しいのか。などの疑問をいだきました。

私は、その会社のバザーに行ってみました。その時私は、障がい者の方々に対して、少し怖いという印象をもちました。身体が不自由で車イスを使っていたり、自分の思いや考えを言葉でうまく表現できない人などが多く、私がそれまで関わったことがない人達だったからです。とつ然障がい者の方に話しかけられ、ビックリしてしまいました。しかし話していくにつれて私の目を見て笑顔で楽しそうに話を聞いてくれたり、優しく私がすることを見守ってくれていることに気がつきました。私が最初に思っていた怖いという印象が間違っていたことが分かったのです。

世の中の人は障がいのある人に対してどのような印象をもっ

ているのか調べてみました。その結果、私と同じように怖いという印象や何を考えているか分からない、気をつかうなどマイナスな印象をもっている人が多いと分かりました。そこで私は、障がい者が思っていることも調べてみました。調べた結果、障がい者の方々は、目が悪くてめがねをかけるのと同じように、不自由さを補う道具や援助があれば普通の人と同じような生活を送ることができるということや「障がい者というだけで同情されたり軽べつされたりすることはたえがたい」、「障がいは、『不幸』ではない。ただ『不自由』なだけ」などと思っていることがわかりました。調べてみて障がい者の方々は、普通の人より身体が不自由なだけでみんなと同じように考えたり生活できるということが分かりました。障がい者の方々も私たちと同じように新たな学びや自己成長を感じた時、人の役に立っているときに幸せを感じています。

私は、障がいのある方々と関わることによって、今までもっていた怖いなどのイメージから私たちと同じように生活したり考えることができている人というイメージに変わりました。障がい者の方々を特別あつかいをするのではなく、いつもと同じように接してよいということが今回わかりました。

みなさんも障がいがある方に対してマイナスなイメージをもっている人が多くいると思いますが、障がいのある方々は私たちより少し不自由だったり、伝えたいことを上手く伝えられないだけで決して不幸なのではありません。不自由さを補って障がいのある方なりに幸せを感じているのです。だから障がいがあるというだけで勝手なイメージを決めつける人が減ってほしいと思います。そのためには、障がいのある方々ともっと身近に関わる機会が必要です。私がそうだったように、関わることで初めて分かることがたくさんあります。障がいのある方々との関わりが、珍しいものではなく、みんなにとってあたり前のものになっていけば、マイナスなイメージをなくしていくことにつながるはずです。

佳作

生きる

久慈中学校 二年
熊谷 野乃花

皆さんは「生きる」ということをどのように考えていますか。私の体験談と共に、私にとっての「生きる」という事を紹介したいと思います。

私が去年剣道の大会で盛岡に行ったときに、盛岡駅で目の見えないおじいちゃんが人混みの中を、白杖だけをたよりに歩いていました。私は大丈夫かな、大変そうだなと思い声をかけようか迷っていると、一人の女性が、

「大丈夫ですか。何かお手伝いしましょうか。」と何のためらいもなく自然に声をかけていました。私はその時、声をかけようと思っていたのに声をかけることを躊躇した自分が恥ずかしく、とても後悔しました。そしてその女性に感謝しているおじいちゃんを見て、次こそは迷う事なく勇気を出して声をかけてみたいと思いました。私がもっと早く声をかけていれば、おじいちゃんは目の見えない恐怖からもっと早く開放されたのにと思いました。

以前私の兄も、あの女性のように困っている人に声をかけたことがありました。一人のおばあちゃんが重そうなスーツケースを持って階段を降りていました。その時兄は迷いなく後ろからスッと手を差しのべ、

「持ちますよ。」

と言って階段の下まで荷物を運んであげました。その時の兄も何のためらいもなく声をかけたのです。その自然な行動がとてもかっこよく、すごいなあと思いました。

私は考えました。なぜ自分がこの二人のように自然に声をかける事ができなかったのか。私は恥ずかしいという気持ちと、その人が嫌がらないか、もし手を貸すことを断られたらどうしようという不安から声をかけることが出来なかったと自分を分析しました。

結局は自分が恥をかきたくない気持ちを優先したのだと思います。それに比べ手を差し伸べた女性も兄も相手のことを思いやる気持ちが優先したために自然な行動ができたと思いました。

私はこの二つの経験をして、誰もが相手のことを考えて行動できる人になったらすてきな世界になると思います。

そして更に私は困っている人だけではなく、周りの人皆に自分から声かけやあいさつをできるように日々心がけたい思いました。

そして何よりも一番大切にしたいのは、やはり家族です。私の家族は祖父、祖母、父、母、兄の六人家族です。年齢も違い様々な考え方や価値観を持っています。

そして私の祖母は認知症です。先日学校で行われた認知症講座という講演会では、認知症の人との接し方や認知症サポータ

ーがどういったものかなどのお話を聞き、クイズなどもして認知症への理解を深めました。私は祖母と一緒に暮らしているので、これからは学んだことを生かして今までよりも祖母とふれあい、祖母が安心して一日一日を過ごせるような家庭を築いていきたいです。

その中で自分にできることを考え皆で支え合って生きていくことが改めて大切だと、今回のことでよりいっそう感じました。

世の中には色々な大切なことがあるけれど、やはり人と人とが支え合い助け合い協力し合い生きていくことを優先したいと思います。

佳作

福祉について

久慈中学校　二年
坂上　ジーナ

福祉と聞いて私が思い浮かぶのは、実際のところ何のイメージもわきませんでした。調べてみると、「福」も「祉」も幸せを意味していて、すべての人が精神的にも、経済的にも満たされている幸せな姿、あるいはそれを実現するための努力という意味があるそうです。これを聞いてもよく分かりませんでした。

しかし、七月にあった宿泊研修での体験で、福祉について考えるできごとがありました。私の職場体験先は滝沢市の巣子という所にある、ケアハウス巣子という介護施設でした。そこでは一階には介護が必要な人が住んでいて、二階には自分で洗たくや料理ができる人が住んでいました。私たちは二階に住んでいる人のベランダのそうじの手伝いをさせていただきました。そうじをしていると利用者のおばあさんが、

「どこから来たの？」

と聞いてくれて、そこから私の住んでいる久慈の話になりました。おばあさんは、私の話を楽しそうに聞いてくれました。また、写真を見せてくれるおじいさんもいました。そのおじいさんは、部屋に写真をかざっていて、偶然にも久慈の海の写真で

した。その人は、若いころ自分が写真好きだったことや、久慈に住んでいたこと、久慈の海にあるきれいな形をした岩を見に行ってほしいなど、熱く語ってくれました。

ケアハウス巣子の利用者の方々と関わってみて、介護施設にいる人たちは認知症や病気で元気がなかったり、会話がうまくできない人が多いと思っていましたがまったくそうではなく、元気で明るく話しかけてくれる人が多くいると分かりました。また、病院みたいな大部屋で暮らしていると思っていましたがケアハウス巣子では一人一部屋でテレビ、エアコン、キッチン、トイレがついていてまるで小さい家のようでした。

よく見ればバリアフリーで車いすでどこへでも行けるようになっていたり、冬は雪が降り、地面が凍ってさんぽができないので廊下を広く長く設計していつでもさんぽができるように工夫されていました。また、共同の場には卓球台や自動販売機、新聞が置かれていて、他の人や職員との交流ができたり、お店に行けない人への配慮を感じました。

ケアハウス巣子で職場体験をさせていただき、最初に調べた「福祉」の意味と当てはまっていると思いました。施設の中で元気で幸せそうに生活している利用者の姿や、その人たちのために施設を工夫して建てた人、毎日お世話をしながら利用者を支えている職員の人たちの存在を体験で知ることができました。

久慈に帰ってきてから、ここにもたくさんの施設があることに気付くことができました。調べてみると、老人の施設にもいろいろな種類があること、障害者の施設などもありさまざまな福祉の施設があるということをさらに知りました。

私が行ったケアハウス巣子は自分のことを自分でできる自立した利用者が多くいましたが、そうではなく認知症が強い人や歩けないなど、自分のことが自分でできない人のための施設や日帰りでお世話をしてもらえるサービスもあるそうです。病院以外でそういうサービスを仕事にして福祉に関わっている人たちが多くいると知り、誰かの幸せのために働くことはすばらしいと思いました。病気の人や介護を必要とするお年寄りの人は決して不幸なのではく、福祉に関わる人たちに支えられて、元気に明るく、幸せに暮らしています。私も誰かの幸せのために働ける人になりたいと思います。

高等学校の部

＊最優秀作

＊優秀作

＊佳作

最優秀作

私が考える「福祉」

久慈東高校 二年
泥 濘 千 咲

私が「福祉」という言葉を初めて聞いたのは、昨年の夏でした。

私が通っている高校には、七つの専門系列があり、その中でも介護福祉系列がある学校は岩手県内に四校しかありません。私は中学生の頃から、高校に進学した際には介護福祉系列に進もうと心に決めていました。今思い返してみれば、その時の私はまだ、介護とは高齢者のお世話をするというイメージしかなかったのだと思います。高校に入学して、一年生の系列体験時に福祉科の先生が「福祉とは、ふつうのくらしをしあわせにという意味があるんだよ」と教えてくれました。私はその時もあまり理解ができず、なぜ先生は当たり前のことを言っているんだろうと思ったことを今でも覚えています。

今年の春に二年生になり、第一希望であった介護福祉系列に進み、授業が始まってすぐに私は驚きました。なぜなら学習する科目が聞いたことがないものばかりで、内容も難しかったからです。数学や英語といった普通科目よりも、社会福祉基礎やこころとからだの理解といった専門科目が多く、介護の意義や役割、福祉の歴史、体の骨や筋肉、コミュニケーション技術のことなど、福祉の専門的な学習を毎日何時間も学んでいます。学習していく中で、目や耳や体が不自由な人、自分で自分の身の周りのことをするのが難しい人など、様々な障害があることを学んだり、差別があるということや、本人や家族を支えるために多様なサービスがあるということを知り、世の中には当たり前のことが当たり前にできない人がたくさんいることを知りました。同時に、その人たちのために私たちにできることは何を学び、考えることの重要性について理解を深めることができました。

二年生の七月からは介護施設での実習が始まりました。私の身近な人に体が不自由で動けなかったり、認知症で物忘れが激しい、障害があるという人がいなかったので、施設の利用者の方とどのように接したらよいのか分かりませんでした。何もできない自分がふがいなく、施設でもきっと暗い顔をしていたように思います。そんな時に、施設の利用者の方から声をかけていただき、思いがけずに話が弾み、緊張をほぐしていただきました。私が思っていたよりもお話し好きな利用者の方が多く、会話の中では大きな笑いが起こったり、利用者の方の笑顔もたくさん見ることができました。

「学生さんと話をすると元気がでるねぇ」

と声をかけていただき、舞い上がるほど嬉しかったです。初めての介護実習はとても大変でしたが、利用者の方の励ましの言葉や笑顔が私の活力となり、頑張ることができました。利用者の方の中には口数が少ない方や、話すことが難しい方もいらっ

しゃいました。それでも声をかけると笑顔を見せてくれたり頷いたりしてくれて、会話がなくてもコミュニケーションは成り立つものだということを教えていただきました。手を握ったり、傍にいるだけでも温かな気持ちが伝わったり、相手に自分自身の思いを伝えることもできるということにも気づかされ、当たり前とは一体どんなことなんだろうと改めて考えることができました。

これまでの授業や実習の中で、私は「福祉」について沢山考えることができました。私が考える「福祉」とは「幸せ」や「幸福」です。この幸せは、一人では感じることができないものだと私は考えます。コミュニケーションが楽しいと思える幸せも、ごはんが美味しいと感じる幸せも、生きていて良かったと思える幸せも、毎日が楽しいと思える幸せも、すべて相手がいるからだと気づいたからです。私ができる「福祉」とは、今学校で学んでいることを実習だけではなく、日常生活のすべてで生かし、誰か一人でも幸せを感じてもらうことだと思います。

少子高齢化が進む中、一人暮らしの高齢者や、孤独死が増えているという話を聞きました。福祉の取り組みやサービスがすべての人に十分に行き届けば、誰一人として孤独を感じることはなく、幸せで豊かな暮らしができると思います。しかし、現状ではそれは難しいことも感じています。それでも、私たち一人ひとりができる些細なことを続けていくことが大切だと思います。挨拶をしたり、困っている人がいれば声を掛け合う。一人じゃないんだよ、というメッセージを発信し続ける。一人でも多くの人に幸せを届け、感じてもらうことが必要です。「福祉」という言葉の意味を多くの人に知っていただき、誰もが生きやすく取り残されない社会を目指していきたいです。私は私ができる「福祉」を積み重ねていくことを、ここに誓います。

優秀作

私の夢とフラダンス

久慈東高校 二年
林 﨑 風 佳

私の将来の夢はブライダル関係の仕事に就くことだ。中学生の頃、ある映画でウエディングプランナーという職業を知ってからウエディングの世界で誰かを喜ばせる、記憶に残る式を創るということに憧れがある。

以前私が学んでいる介護福祉系列の介護実習で障害者施設を訪れた際、「進路と結構違うけど、どうして介護を学ぼうと思ったのですか。」と職員の方々によく聞かれた。

私が介護福祉系列に進んだ理由は、以前から手話や点字に興味があったため、様々な人とコミュニケーションをとりたいという気持ちが強くなったからだ。また、離れて暮らしている祖母の腰痛の悪化と、うつ病になり介護が必要になったことも理由の一つだ。数年前までは元気に過ごしていたが、腰痛で長時間同じ体勢でいることが辛く、一人で歩くことが不安定だ。しかし、現在は以前より少しずつ笑顔が戻ってきている。

そんな祖母がこれまでに一番喜んでくれたことは、私が踊ったフラダンスのステージを見た時だった。そのステージには祖母と同年代の方がほとんどで、中には九十代の方もいて、どの方も大変元気で生き生きと踊っていた。私は小学校の一年生の頃から久慈市内でフラダンスを習っていたため、市内のイベントで踊ることが多くあった。今年の七月に先生から声をかけられ初めて盛岡市内のイベントに参加し出演した。そしてここで初めて祖母に自分の踊りを見てもらえた。この時は大変嬉しかった。

私はフラダンスには人を笑顔にしたり、幸せにできる力があると思っている。実際に私は学校でイライラしていたり、嫌なことがあってもフラダンスの練習に行くとそのことを忘れて踊ることができ、息抜き、気分転換になっている。部活動やテストがあっても十年近くほとんど休みなしで通えているのは、フラダンスが好きだし、楽しいからだ。

そんなフラダンスが福祉の世界には必要だと私は思っている。ボランティアで訪れた障害者施設の夏祭りで、ある方が民謡で会場を盛り上げていた。それを見て私はうらやましく思い、できれば自分も踊りたいと思った。施設に入所している方々は、屋外でのステージを見る機会が少ないと感じていた。そのため見るだけ、曲を聴くだけでも南国の気分を味わい、心から笑顔になって欲しいと思っていた。数年前まで行われていた福祉祭りで一度だけ屋外ステージで踊った経験がある。その時の客席には施設の方々がたくさん座っており、その中には障害を持った方もいらしていた。楽しそうにステージを見ていたことを鮮明に覚えている。

私が望む姿はこれだ。

フラダンスを踊れる、踊れない、障害の有無、年齢性別の関

係なくフラダンスを通して心も体も生き生きとして欲しい。一度ステージを見て

「元気が出た。もう一度見たい。」

「やってみたい。」

という気持ちになれば、それは介護予防にもつながると思う。

祖母が通うデイサービスには、カラオケができるスペースがある。祖母は家でも演歌を歌っていたり、テレビを見ながら手を動かしたりしている。祖母の趣味は音楽なのかもしれない。デイサービスで音楽を楽しんでいるのであればそれは喜ばしいことである。しかし、通っている施設に楽しみがあるわけでもなく、通所の日ということでとりあえず通っているだけという方もいるのではないかという疑問もある。そのような方に何かできないか。

私の将来の夢はブライダル関係の仕事に就くことだが、それだけではない。フラダンスを通して様々な人に発信できるようにもなりたい。ブライダルもフラダンスもたくさんの人を幸せな気持ちにさせられる魅力がある。この魅力を介護が必要な方や障害者の方々に沢山届けたい。

佳作

筆談ボードと福祉

久慈東高校 二年
小上柚奈

以前私が買い物に出かけレジに行ったときにこのようなものがありました。それは「筆談ボード」です。筆談ボードという言葉を聞いたことがある程度だったので初めて見た時は実際にあったことに驚きました。そこで筆談というコミュニケーションについてもっと知りたくなり調べてみることにしました。

まず筆談は何かということについて調べたところ、筆談は聴覚や言語に障害がある方とコミュニケーションをとる手段のひとつだそうです。メリットやデメリットについても調べました。メリットは静かなコミュニケーション方法であり、周りの人々に気を遣わずプライバシーを守りながらのやりとりが可能なことです。一方デメリットは、音声での会話ではないのでやりとりに時間がかかることです。メリットもデメリットもありますが、言語の壁を一番気にせず会話を行うことができる手段だと思いました。他にはどのようなコミュニケーションがあるのかも知りたくなり調べてみました。手の動き、顔の表情などでもコミュニケーションがとれるということを知りました。誰とでも壁を感じることなく会話できることは幸せなことだと思いました。お店に筆談ボードなどの幅広くコミュニケーション

がとれるものを設置している所はまだ少ないと思いますが、このような取り組みを増やすことは福祉が広まっていく第一歩になると思います。

福祉と言えば、しあわせ、幸福、生活の安定や充実のことを指します。人それぞれ幸福や生活の充実を感じるタイミングは違います。上手くコミュニケーションをとれない方にとっては、会話することではなく、筆談ボードなど音声での会話以外の手段で人と関われることに幸福を感じる方もいると思います。

私が最近体験した保育園でのボランティアを通して福祉を感じることができました。ボランティアの内容は縁日などの行事のお手伝いでした。準備の際に子供たちはどんなものを作れば楽しんでくれるのかなど沢山考えて作りました。そして当日には子供たちの反応を楽しみながら関わることができました。普段友達と話している時と違い、もっと優しい声のトーンで話したり、笑顔を意識するなどして思いやって関わる事ができました。やはり一番言われて嬉しい言葉は「ありがとう」という言葉やタッチしてくるなどの子供たちからの関わりでした。介護施設で実習させていただいた時も同様に感謝の言葉や励ましの言葉はエネルギーを与えてくれます。このような温かい言葉をかける、かけていただくことでお互いに良い関係も築けると思います。自分が笑顔で接することで相手の方まで笑顔になっていただくことが嬉しいので、今後も心がけて接していきたいと思いました。日常では最初あまり良い印象を持っていなくても、話すうちに徐々に打ち解けることもあります。そのような時に何が大切なのかを福祉とつなげて考えてみました。福祉で大切なことは、思いやりとコミュニケーションだと考えました。思いやりはまず第一に相手の立場になって考えないと成り立ちません。そのためどの年齢でも関わらず、どうすればこの人はいい気持ちになるのかを考えて行動することが大事だと思いました。人とコミュのケーションをとる方法というのはたくさんあると思います。言葉以外でも手や表情で気持ちを伝えることもできるのでコミュニケーションは幅広いと思いました。

今回筆談ボードがお店にあったから福祉についてもっと深く考えるきっかけになりました。様々調べる中で新しい知識が増え、今後の実習やボランティアなどにも役立つと思いました。これをきっかけに、普段の生活から思いやりやコミュニケーションを意識し、もし困っている人がいたら自然に手を差し伸べられるようになっていきたいです。

審査委員の感想

審査委員長　石川　えりか

○講　評（小学校高学年の部・高等学校の部）

今年度の福祉作文コンクールも、たくさんの児童生徒の皆さんから応募がありました。自分の体験を通じて考えを深めている作文が多く、相手の状況を理解し、自分がすべきことをじっくりと考えて言葉にしている様子が印象的でした。また、日本のみならず世界的に問題になっているフードロスや飢餓等に目を向けた作文もありました。

小学校高学年の部の最優秀作は、目の不自由な祖父が今は楽しく生活しているが、今後症状が進んだ場合の心配について触れ、福祉講座への参加や２０２４パリパラリンピックの観戦から、障がいがあっても楽しく生活できるということを感じ、それは福祉が充実している社会と周りの優しさのおかげだと気付いています。そのような社会であれば、祖父も安心して楽しい時間を過ごすことができると実感し、明るく前向きな文章で締めくくっています。

高等学校の部の最優秀作は、学校の授業を受け、介護施設に行った際の気づきから、自問自答を繰り返している様子が伝わってきます。福祉における幸せは一人では感じることができない、相手がいるから感じるものであること、自分にできる些細な事を続けていくことによって「誰もが生きやすく取り残されない社会を目指していきたい」と力強く宣言している点を評価しました。

高等学校の部の応募作品はいずれも、授業での学びや介護等の体験により、自分の進路や今後の福祉とのかかわりについて考えたことを述べています、さらに専門的な学びを深め、活躍を期待しています。

副審査委員長　所　慎一郎

○講　評（中学校の部）

福祉作文コンクールは、時代を担う小・中・高校生の皆さんが福祉作文を通じて、思いやりの心や助け合いの心を養い、自分たちが暮らしている地域への理解と関心を高めることを目的として実施しています。

今回、中学校の部には、十七編の応募がありました。中学生として福祉、家族、社会のことについて、日頃から考えていること、体験を通して学んだこと、これからの自分の生き方に生かしたいこと等について、自己と向き合いながら作文にまとめた、すばらしい作品がたくさん集まりました。

その中で最優秀に選ばれた作品は、福祉施設での体験活動を通して、施設職員や利用者の方から多くを学び、福祉の大切さを実感し、将来、福祉の仕事に携わっていきたいという思いをもつことができたことが書かれています。その中で、「福祉は私たち一人ひとりの心の中にある。誰かを助けることが、幸せを伴いながら自分の生きる糧になるのだ。」と述べています。現代の社会において、身勝手な理由での事件が後をたたない昨今、相手のことを思い、誰かを助けることが自己の生きる糧につながっていくのだという主張は、人として生きていく上で大切なことですし、一人でも多くの人が、思いやりの気持ちを持てば、誰一人も取り残すことのない社会の実現にもつながっていくのだと思います。そういった面でも、次代を担う中学生が福祉について真剣に考え、実行していこうとする姿から、今後の社会は、より明るいものになっていくのだと強く感じました。

今回の審査を通して、今後、作文を書く際に期待することについて二つ申します。一つ目は、自分が日常感じている思いや体験して学んだことについて、これからも自分の言葉を大切にして主張してほしいということです。どこかで聞いたことのある文言ではなく、自分が感じた思いを素直に表現し、読み手に自分の思いを伝えていってほしいと思います。二つ目は、これからも自分が主張したいことを題名に込めてほしいということです。題名には、作文の内容を的確に伝える役割があります。ぜひ、今後も作文を書く際には、題名についても意識してほしいと思います。

最後に、これからも様々な体験等を通して、「福祉」について自分の考えを広く、深くして、自分の生き方について結び付けてほしいと思います。そして、本コンクールに自分自身の考える「福祉」に関わる思いを伝え、たくさんの人に広めてほしいと思います。

令和６年度福祉作文コンクール応募者・入選者

■小学校高学年の部

No.	学　校　名	学年	氏　　名	題　　名	賞
1	小久慈小学校	4	松本瑠璃（まつもとるり）	みんなで協力して生きていく	最優秀作
2	長内小学校	4	木村あかり（きむら）	福祉について知った日	佳　　作
3		4	小野莉愛（おのれいな）	やさしい福祉	
4		4	鹿糠侑亮（かかゆうすけ）	福祉出前講座と孫認知症講座について	
5		4	生平梨花（おいたいらりんか）	わたしが体験してわかったこと	
6		4	本波杏理（ほんなみあんり）	福祉出前こうざ、認知症こうざでの体験	
7		4	勝田詩（かつたうた）	孫にん知症こうざを受けて	
8		4	髙安泰杜（たかやすたいと）	福祉出前こうざで学んだこと感じたこと	
9	侍浜小学校	4	越戸咲名（こしどさな）	当たり前に感謝して生きる	佳　　作
10		4	菅原一真（すがわらかずま）	フードロス削減大作戦	佳　　作
11		4	久慈京佳（くじきょうか）	飢餓の現状	優 秀 作

■中学校の部

No.	学　校　名	学年	氏　　名	題　　名	賞
1	山形中学校	3	大畑寧々（おおはたねね）	福祉の心を育てる	最優秀作
2	侍浜中学校	3	松原楓（まつばらかえで）	働く人にリスペクトを	
3		2	齊藤優李愛（さいとうゆりあ）	災害を通して考えたこと	
4	久慈中学校	3	佐々木莉愛（ささきりあ）	伝えたいこと	
5		3	柳清水利空（やなしみずりく）	あっついおにぎり	
6		3	細谷地悠（ほそやちはるか）	認知症と介護	
7		3	大向彩葵（おおむかいさき）	ふつうのくらしをしあわせに	審査委員会特別賞
8		2	熊谷野乃花（くまがいののか）	生きる	佳　　作
9		2	坂上ジーナ（さかがみ）	福祉について	佳　　作
10		2	畑田楓磨（はたけだふうま）	コミュニケーションの重要性	
11		2	桑田杏花（くわたもも）	差別やいじめをすることで	
12		2	三上蓮斗（みかみれんと）	だれでも平等に活躍する社会	
13		2	鈴木稚望（すずきちの）	障がい者の方々との関わり	優 秀 作

■中学校の部

No.	学　校　名	学年	氏　　名	題　　名	賞
14	長内中学校	2	関口杏（せきぐちあん）	「繊細さん」の生きづらさ	
15		2	林咲希（はやしさき）	幸せに生きるために	
16		3	奥寺美優（おくでらみゆ）	誰もが幸せな社会	
17		3	中村理々華（なかむらりりか）	「誰かの役に立つ」こと	

■高等学校の部

No.	学　校　名	学年	氏　　名	題　　名	賞
1	久慈東高校	2	小上柚奈（こかみゆな）	筆談ボードと福祉	佳　　作
2		2	林﨑風佳（はやしざきふうか）	私の夢とフラダンス	優秀作
3		2	泥濘千咲（ぬかりちさき）	私が考える「福祉」	最優秀作

令和６年度福祉作文コンクール実施要項

１　趣　　旨

　次代を担う小・中・高等学校の児童・生徒を対象に、福祉作文を通じて、思やりの心や助け合いの心を養い、自分たちが暮している地域への理解と関心を高めることを目的として福祉作文コンクールを実施する。

２　主　　催

久慈市社会福祉協議会

３　後　　援

久慈市教育委員会

４　募集内容

日常生活の中で感じたこと、考えたこと、体験したことなど。
※別添資料を参考にしてください。

５　応募資格

市内の小学校・中学校・高等学校に在籍している児童・生徒

６　応募方法

（1）制限枚数（字数）
- 400 字詰原稿用紙を使用
- 小学生低学年（1 ～ 3 年生）2 枚以内
- 小学生高学年（4 ～ 6 年生）2 枚以上 3 枚以内
- 中学生 2 枚以上 4 枚以内
- 高校生 5 枚

（2）応募数
各小学校 10 編以内、各中学校 10 編以内、各高等学校 10 編以内

（3）応募先
久慈市社会福祉協議会　福祉作文コンクール係
〒 028-0014　久慈市旭町 7 － 127 － 3　TEL　53 － 3380

（4）応募期間
令和 6 年 9 月 2 日（月）～令和 6 年 9 月 25 日（水）必着

７　審　　査

主催者で設置する審査委員会で決定する。
最優秀作：各部門各 1 編　　優秀作：各部門各 1 編　　佳作：各部門各 1 編以上
審査委員会特別賞：全部門若干

8　入選発表

令和 6 年 11 月に入選者の在籍する学校長に通知する。

9　表　　彰

入選者へは、主催者より賞状を贈る。

10　その他

(1)　応募作品は原則として返却しない。入選作品の版権は主催者に帰属する。
(2)　主催者において入選した作品をまとめた作文集を発行する。
(3)　本事業は赤い羽根共同募金の助成を受けて実施する。
(4)　最優秀作受賞者に記念品（図書カード 3,000 円分）を贈る。
(5)　優秀作受賞者に記念品（図書カード 2,000 円分）を贈る。
(6)　佳作受賞者に記念品（図書カード 1,000 円分）を贈る。
(7)　応募者に記念品（図書カード 500 円分）を贈る。

＜指導にあたっての参考＞

「福祉」の「福」も「祉」も幸せを意味しています。福祉というのは、すべての人が、精神的にも、経済的にも満たされている幸せな姿、あるいはそれを実現するための努力のことです。先生がたのご指導にあたっては、次のことがらなども参考にしてください。
また、題名は統一させずに、個々の表現で書くようにご指導ください。

募集する具体的内容は

◇　すごく幸せな様子と、それがどのようにしてそうなったのか。
◇　恵まれていない、満たされない方々の様子から考えたこと。その方々のために何をしたか。何をしたいか。
◇　お年寄りや身体の不自由な方々について、考えたこと。したこと。したいと思うこと。
◇　差別やいじめについて考えたこと。
◇　戦争や紛争や災害で、幸せでなくなっている方々について考えたこと。したこと。したいと思ったこと。
◇　自然災害で体験したこと。考えたこと。
◇　「福祉」について日ごろ考えていること。
◇　社会問題 (貧困や虐待、老老介護など) について考えたこと。したこと。したいと思ったこと。
◇ コロナウイルス等社会情勢について感じたこと

では、その材料は、どこから見つけるのか？

◇　家族のふれあいや、出来事の中から
◇　学校や友達とのふれあいで体験したり、見たり聞いたりしたことの中から
◇　近所で見聞きした出来事の中から
◇　地域活動、体験活動、訪問活動、交流活動などに参加した体験の中から
◇　読書体験の中から
◇　テレビ、ラジオ、新聞、インターネットなどで見聞きした中から

令和６年度福祉作文コンクール審査委員

職　名	氏　　名	所 属 団 体 等
委 員 長	石　川　えりか	久慈拓陽支援学校長
副委員長	所　　慎一郎	夏井小学校副校長
委　　員	杉　浦　美香子	久慈小学校副校長
委　　員	軽　石　邦　子	侍浜中学校副校長
委　　員	中　田　悦　子	久慈市ボランティア連絡協議会長
委　　員	安　部　信　二	久慈市福祉事務所社会福祉課長

令和６年度
福祉作文コンクール入選作文集

令和６年11月

社会福祉法人久慈市社会福祉協議会

〒028−0014
久慈市旭町7−127−3
TEL　0194−53−3380
FAX　0194−52−7715

この作文集は共同募金助成金の一部をあてて作成しました。